

通史の索引を用いた京都の都市史の大局的分析

正会員 ○北 雄介*1

7. 都市計画—1. 都市論と都市形成史—c. 都市形成史・都市計画史

都市史, デザイン論, 時系列分析, 索引, 京都

1 序

1. 1 背景と目的

都市では、当初のデザイン主体が意図していなかったであろう出来事が起こっている。たとえば平安京のグリッドプランは現在にまで基本構造を残しながらも、建物は建都当初と大きく異なる。高速移動を目的に発明された自動車は交通渋滞を引き起し、一方で収集や改造が趣味として広まってもいる。このように考えると、デザイン行為というものは「今・ここ・我々にとって」だけでなく、より広い文脈において捉え、評価する必要がある。

これに対し筆者らは、都市のデザインの歴史を従来のデザイン論よりも大局的な視点から捉えようとする研究を展開している。そのために、個々のデザインプロセスを「ある時刻に、主体が、その時のコンテキストの下、デザイン対象を変化させる」というように単純化して捉え、そのプロセス間の関係性をネットワーク化して記述するという理論モデルを提唱している¹⁾。

都市の歴史において、デザイン主体である「人間」、デザインの主要な対象である「場所」はとりわけ重要な要素である。本稿ではこの両者の歴史上への出現の仕方を、京都の都市史を題材に分析する。上述の理論モデルを用いた詳細な記述・分析に先立ち都市史の大局を定量的に素描するのが、本研究全体における本稿の目的である。

1. 2 研究方法

本研究の分析のためには、都市史に関して網羅的に、十分な量で、かつある程度一定の論調で述べられた文献史料をデータソースとする必要がある。そこで、通史を用いる²⁾。具体的には、計80名の歴史研究者によって編まれた全10巻から成る通史『京都の歴史』²⁾のうち、年表・事典である第10巻を除いた9巻を分析する。

この9巻の本文は合計5,502ページと長大であるが、本稿では「人間」「場所」の出現の仕方を概観するため、索引に着目する。索引を用いれば、どのような項目がどの

巻でどの程度の頻度で述べられているかを、網羅的かつ定量的に把握することができる³⁾。

1. 3 本稿の流れ

2章では、『京都の歴史』の索引を分析する前提として、最初に9巻の巻構成を分析する。3章では、索引データの表記ゆれの吸収やカテゴライズなどの処理を行ない、得られたカテゴリーについて分析する。4章では、カテゴリーの出現の仕方の時代ごとの変化を分析する。

史料の性質やデータの処理などについては、注記しておくべき煩瑣な事項が数多いが、論述の流れを遮らないよう注釈にて述べることとする。また本稿での考察は各巻の中身に踏み込んでおらず、一般的な歴史的知識に基づいた仮説に留まることをあらかじめ断っておく。

2 分析対象史料の巻構成の分析

図1の実線は巻ごとのページ数³⁾を示している。4巻をピークとしたばらつきがある。

図1の破線は巻ごとのページ数を、その巻で述べられている期間の年数⁴⁾で割ったもので、その巻の期間がどれだけ濃密に論じられているかを示している。全体的には、巻を追うごとに数値が上がる傾向が認められる。史料の

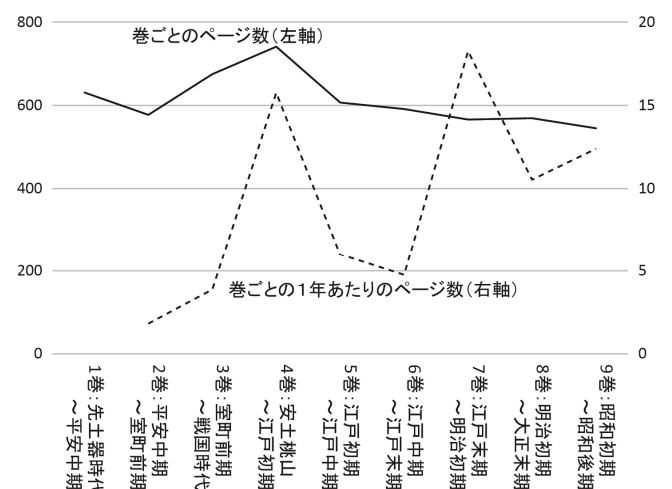


図1 巻ごとのページ数/1年あたりのページ数

表1 掲載ページ数の上位20項目

項目名	p数	大分類	カテゴリー		
1 祇園社	135	場所	神社	寺院	
2 伏見	118	場所	都市・地域		
3 東寺	97	場所	寺院		
4 延暦寺	93	場所	寺院		
4 祇園会	93	その他			
6 二条城	92	場所	軍事施設	政庁・役所	住居
7 北野神社	86	場所	神社		
8 相国寺	66	場所	寺院		
9 建仁寺	63	場所	寺院		
9 仁和寺	63	場所	寺院		
9 西陣	63	場所	都市・地域		
9 桂川	63	場所	地形		
9 所司代	63	人間	役人	総称	
9 後水尾天皇	63	人間	天皇		
9 後白河天皇	63	人間	天皇		
9 猿楽	63	その他			
17 嵯峨	62	場所	都市・地域		
18 山科	59	場所	都市・地域		
18 四条河原	59	場所	都市・地域		
18 足利義満	59	人間	武士		

表2 853項目についての大分類のクロス表

	人間	人間以外	合計
場所	45	357	402
場所以外	383	68	451
合計	428	425	853

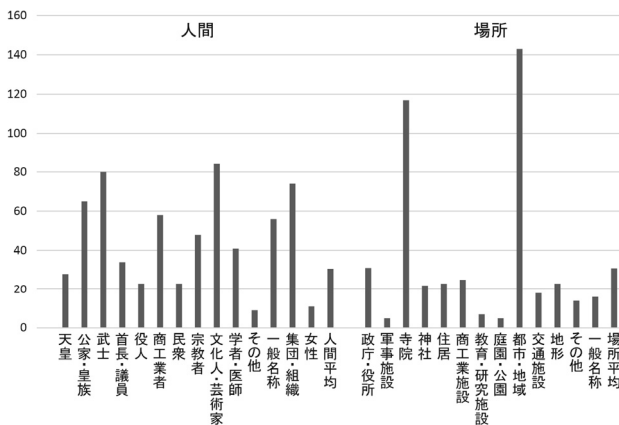


図2 カテゴリーごとの項目数

数が多く、考証が進んでいることが要因として考えられる。その中でも突出しているのが4巻（安土桃山〜江戸初期）と7巻（江戸末期〜明治初期）である。それぞれ政権が移り、都市の在り方にも変化がある時期のため、詳細に論じられている。それらに挟まれた、比較的平和で変化に乏しい江戸時代（5〜6巻）は、相対的に低い値をとる。今後の分析にあたり、変動の度合いと論述の密度が関連することには注意が必要である。

3 「人間」と「場所」のカテゴリーごとの分析

本節では歴史の大局的な流れを掴むため、索引に出現する「人間」と「場所」をカテゴリー分けして分析する。

3.1 索引データの処理

3.1.1 項目の統合

索引は、項目名と掲載ページのセットから成る。全9巻でのべ21,249項目が挙げられているが、その中には同一表現が複数巻に掲載されている場合や、同一巻あるいは複数巻において同じ内容が異なる表現で表されている場合がある（「祇園社」と「八坂神社」、「歌舞伎」と「かぶき踊」など）。これらはまとめて扱うことが望ましく、項目の統合処理を行なった^{注5)}。

その結果、21,249項目は16,764に統合された。今後この統合された項目を単に「項目」と呼ぶ。本稿ではこのうち主要な項目を分析するため、以後、掲載ページ数が9以上（巻平均1ページ以上）の853項目のみを対象とする。

3.1.2 項目のカテゴリライズ

次に、項目をカテゴリライズする。カテゴリーは細かすぎると歴史の大局を直感的に把握できず、大きすぎても分析が粗くなるため、適切なスケールとする必要がある。

まず索引の項目から「人間」「場所」を抽出する^{注6)}。次に「人間」は主に「職業」で11に分類した^{注7)}。他に、職業ではないものの分析上有意義と考えられる「一般名称」「集団・組織」「女性」も同列で扱うこととする^{注8)}。「場所」は「種別」で12分類し、他に「一般名称」も同列で扱う。

一つの項目が複数カテゴリーに入ることを許容する。掲載ページ数上位20の項目を表1に示す。

3.2 カテゴリーごとの項目数

まず表2は大分類のクロス表である。「人間」「場所」の数の差がほとんどなく、どちらにもあてはまらないものは約8%にすぎない。「人間」「場所」が歴史を記述する語彙として非常に重要であることがわかる。なおこの8%には、芸能や文化、祭や出来事を指す用語が多い。

次に図2は各カテゴリーに入る項目数であり、カテゴリーの重要度の指標の一つとなる。

「人間」のカテゴリーに比べ、「場所」では差が激しい。町や村などの地域名を指す「都市・地域」が多いのは当然であるが、「寺院」の数が目を引く。京都という都市がいかに仏教と関連が深いかが伺える。

「人間」の「宗教者」と「場所」の「寺院」「神社」、「人間」の「武士」と「場所」の「政庁・役所」「軍事施設」など比較的明確な対応関係がある。しかし「人間」で最多の「文化人・芸術家」には、明確に彼らが用いる「場所」のカテゴリーはない。「人間」と「場所」との対応関係は都市史の分析において重要な視点であり、さらなる分析が必要だと筆者は考えている。

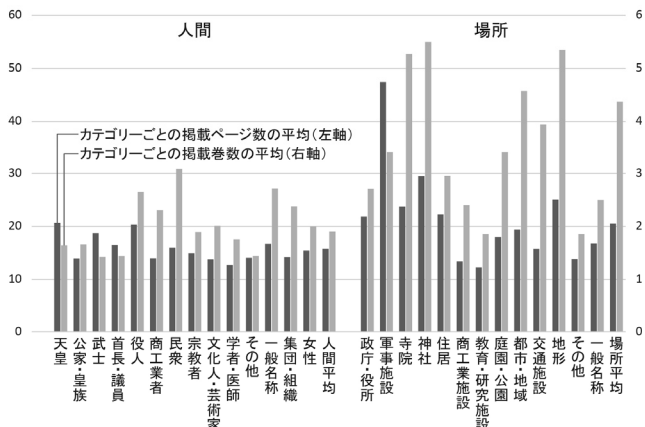


図3 カテゴリーごとの掲載ページ数の平均／掲載巻数の平均

3.3 カテゴリーごとの掲載ページ数の平均

図3左軸は各カテゴリーに含まれる1項目あたりの掲載ページ数の平均を示しており、カテゴリーの個々の項目の重要度を示している。

全体に差があまりない中で、図2では値の小さかった「軍事施設」の値が飛び抜けている。具体的には「二条城」「聚楽第」「伏見城」「淀城」「お土居」という五つで、一つ一つが高い存在感を示す。他に「神社」「地形」なども項目数に比べて一つあたりの重要度は高い。

3.4 カテゴリーごとの掲載巻数の平均

図3右軸は各カテゴリーに含まれる1項目あたりの、掲載されている巻数の平均を示し、各カテゴリーがいかに持続的に歴史に登場するかを意味している。

ここでは「場所」の平均値が「人間」の平均値の倍以上と、大きな差が認められる。「人間」と「場所」では歴史における持続性が異なる。空間の持続性が高いことはアルヴェックス³⁾なども指摘している。

「人間」では、主に個人名で記される「天皇」「武士」などよりも、「役人」「商工業者」「民衆」「総称」「集団・組織」のような多人数で同じような振る舞い方をするものの方が、歴史的持続性が高いことがわかる。

「場所」では「寺院」「神社」の値が高い。これらは場所であると同時に教団という組織とも関係しているため、高い値になると考えられる。「地形」は都市において建築物よりも基層に存在し、高い値となっている。

4 カテゴリーの時系列分析

前2章の分析方法を掛け合わせ、カテゴリーのあらわれかたの時系列変化を分析する。その際2章で述べたように各巻でページ数に差があるため、各カテゴリーの中の項

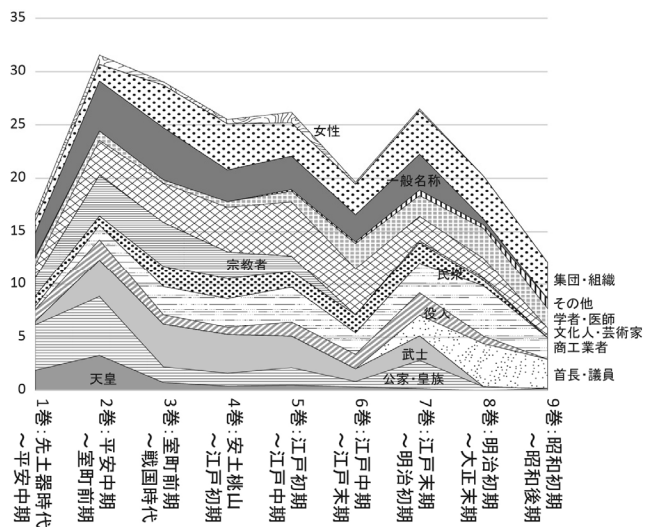


図4 「人間」のカテゴリー密度の変遷

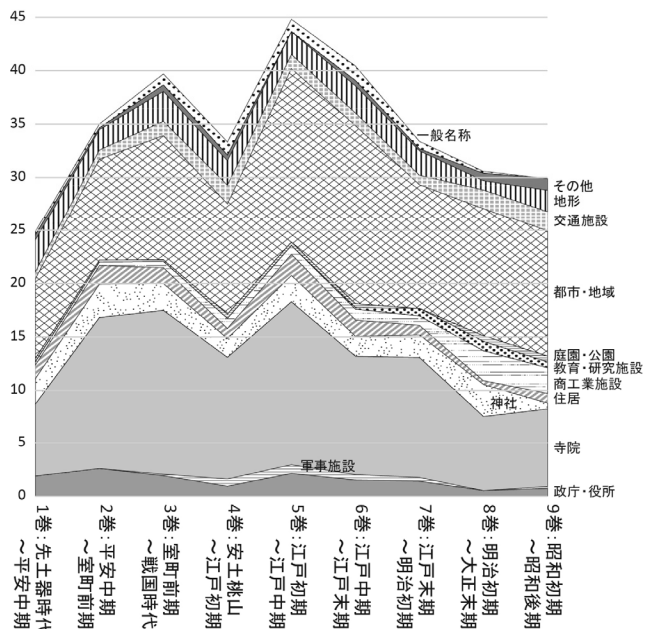


図5 「場所」のカテゴリー密度の変遷

目の、各巻の100ページあたりののべ掲載ページ数^{注9)}を算出し、「カテゴリー密度」と呼ぶ。図4、5はそれぞれ「人間」「場所」のカテゴリー密度の変遷を示す。

共通して、1巻と9巻の値が低い。時系列の両端にあるため他巻と共通する項目が少なくなり、本稿の分析対象としている853項目に入りにくくなるためと考えられる。

1年あたりのページ数(図2破線)の少ない5、6巻では「人間」が低く、「場所」特に「都市・地域」が高い値をとる。特定の人物よりも、無名の民衆や地域という単位の動きが多かった時代だと読み取れる。

次に「人間」に着目する。「天皇」「公家・皇族」と「武士」の関係が2～3巻で逆転し、「首長・議員」は明治維新以降に出現する。これは政権主体の変遷を示している。

ただし武士政権下でも「公家・皇族」が一定数維持され、7巻では増加に転じている。詳しくは日本通史との比較が必要であるが、京都の歴史の特徴と言えるかもしれない。

「宗教者」は江戸中期の時点ではぼ姿を消す。織豊期から江戸初期の仏教に対する排斥、懐柔策の影響が読み取れる。この間に対照的に「学者・医師」が増えており、宗教から科学への転換期だと解釈できる。

「場所」は、「人間」に比べてカテゴリーごとの増減の仕方に違いが少ない。「人間」の職業に比べ、「場所」の属性（主に機能）は持続性が高い。明治維新以降に明確に増加しているのは「教育・研究施設」「商工業施設」で、近代化の影響と考えられる。

「人間」の「宗教者」について江戸以降はほとんど記載されなくなったのに比べ、「場所」の「寺院」「神社」はあまり減少しない。目立った宗教者が出なくなっても、施設としては存在し続けた。また廃仏毀釈や観光化のように、宗教性が縮小するような出来事が多く記載されているのもこの要因と思われる。掲載ページ数と勢力の強さは、厳密には比例関係にないことがわかる。

5 結

本稿では、都市のデザインの歴史を大局的視点から捉えるという本研究の趣旨に沿い、都市史の一側面を定量的に記述することができた。得られたグラフの傾向は、実際の歴史の大まかな流れと対応していることが読み取れた。またそのような考察を導いた「人間」と「場所」に関するカテゴリーも、ある程度有用であると言える。

しかし本稿では、各巻の本文の内容に立ち入らず、一般に知られている歴史的知識、歴史解釈を分析に援用している。したがって本稿で得られた考察は仮説でしかなく、また知見としても決して新規性が高いわけではない。

本研究は本来、歴史上の出来事を一つ一つ記述し、その出来事から成るネットワークを分析することで、歴史に関する知見を、特に都市デザインの観点からボトムアップに析出する研究である。これに対して、本稿は「逆方向」のアプローチである。ただし本稿により、大まかな歴史の流れを把握でき、記述に有効なカテゴリーを得ることもできた。今後はこれらを作業仮説としながら、「正方向」のアプローチを試みていきたい。

注釈

注1) 文献史料を研究するにあたり、以下のことに留意しなければならない。

- ①文献史料に記されるのは歴史の一部である
- ②著者の専門領域や考え方により記述内容には偏りが生じうる
- ③「史実」も蓋然的である（約40年前に刊行された『京都の歴史』には、現在は否定されている学説（鴨川の付け替え説など）も掲載されている）このことは文献史料を用いた研究一般に妥当する。通史を用いることで①②は緩和されるが、やはり完全ではない。したがって本研究の方法による分析は、対象とする史料に相対的である。

注2) 『京都の歴史』の索引は全ての用語を網羅しているわけではなく、全ての掲載ページが記されているわけでもない。しかし、歴史の大まかな傾向を掴むためには十分だと考えられる。

注3) 本文のみのページ数。巻末の年表や索引などは含まない。

注4) 各巻の巻末に、当該巻に記載されている期間の年表が掲載されており、その最後の年と最初の年との差をとった。第1巻については年代が正確にわからない先史時代から年表が始まっているため、この分析からは除外した。

- 注5) ・項目名は複数が併記されていたり括弧書きで捕捉されたりする場合がある。たとえば「祇園社、八坂神社」と併記されている場合は他の巻の「祇園社」「八坂神社」も同一項目に統合し、「久世（村）」とある場合は他の巻の「久世」「久世村」も統合する。「村」「町」「郷」「荘」などの有無は巻ごとに異なる場合があるが、同一内容の場合は統合する。
- ・同一名称でも複数の意味がある場合は区別する（例：「一乗寺」…寺院名と地域名、「北山殿」…建物名と人名）。
 - ・同一名称で代替わりや場所の移転などがあつたものは、同一として統合するが、明らかに関連性がないものは分離する。
 - ・「京都町奉行」「伏見奉行」など、伏見の施設や役職は京都のそれと明示的に別のもので扱われる傾向があるので分ける。京都内の東と西などは、まとめて扱われる場合が多いので統合する。
 - ・統合された項目内で、掲載ページの重複がある場合はカットする。

注6) 「六波羅探題」「土倉」のような組織とも場所ともなりうるものについては、「人間」「場所」の両方に分類する。ただし、3.4にも記すように「寺院」「神社」も場所だけでなく組織としての側面もあるが、あまりに数が多く「人間」「場所」の差が曖昧になるため、「場所」のみとした。より精密な分析のためには、本文を精査する必要がある。

注7) 人間や場所の分類には、生物分類における「繁殖方法」「足の数」のような明確な基準が確立されておらず、ツリー構造に分類すること自体も難しい。本稿のカテゴリーは明確な階層構造ではない（たとえば「天皇」は「皇族」に含まれるはずであるが、「皇族」内で特別な位置を占めることから別のカテゴリーとしている）。あくまで本稿の分析上の有意性のためのカテゴリーであり、今後さらなる検討を加える必要がある。

注8) 「職業」「個別名称/一般名称」「個人/集団・組織」「性別」を並行させるファセット分類の考え方である。ただし、たとえば「男性」は「性別」において圧倒的多数を占めており、「男性」の増減が有意な分析を導くとは思われない。そこで「職業」以外のファセットにおいては、項目数が少数の方だけを分析に用いることにした。

注9) 注5)の場合とは異なり、カテゴリー内の項目同士で同一ページに掲載されていても重複してカウントする。

参考文献

- 1) 北雄介・中小路久美代・門内輝行：長期的視座に基づくデザイン概念の再解釈—CSOモデルを用いて—, Designシンポジウム2014発表梗概集, pp.41-48, 2014.11. 他
- 2) 京都市編：京都の歴史1～10, 学芸書林, 1970～1976.
- 3) アルヴァックス, M.: 集合的記憶, 小関藤一郎訳, 行路社, pp.163-207, 1989.

謝辞

本研究の一部は、JST, CRESTの支援を受けています。また本稿の分析にあたり、中小路久美代先生、門内輝行先生、坂口智洋氏には貴重な示唆をいただきました。記して感謝いたします。